



Title	「シリアをまた行きたい国にする」ために
Author(s)	中野, 貴行
Citation	目で見えるWHO. 2023, 83, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「シリアをまた行きたい国にする」ために



NPO法人「Piece of Syria」代表理事

中野 貴行

神戸市外国語大学出身。2010年まで青年海外協力隊としてシリアで活動。2016年にPiece of Syriaを立ち上げ、2021年にNPO法人化。

シリアと聞いて、どんなイメージを持っていますか？

「難民」「戦争」と言った印象を持たれる方が多い中東の国シリア。ですが、私が住んでいた頃の2010年頃は「日本以上に平和で豊か」と感じる日常がありました。

夜に出歩いても危険を感じない治安の良さで、落とし物は全て返ってきました。就学率は99.6%で大学まで無料、医療や出産も無料です。四季があり、食料自給率も108%で野菜と果物は安価で美味しく、シリア料理は美食で有名です。昼の2時には仕事が終わりで、大きな家で家族みんなで食事をする、のどかな日常は「羨ましい」とさえ思えるほどです。

シリアは歴史も深く、世界で一番古くから人が住み続けている古代都市として首都のダマスカスや第二の都市アレップなど6つの世界遺産を有します。遺跡以上のシリアの魅力は「おもてなし」です。道に迷いそうになったら、皆が手伝おうとしてくれる人が何人も出てきて、バス停まで連れて行ってくれるのは勿論のこと、バスに乗ったら隣に座った人が

バス代を気づかないうちに払ってくれて「遠くから来てくれてありがとう」と微笑まれる…なんてことは、シリアに行ったことがある旅人なら誰もが経験したことでしょう。喉が乾いたら、近くにある家をノックすれば、水を出してくれて、家の中に招待をされて、お茶やご飯、時にはパジャマを渡されて「今日は泊まていくだろ？」ということもありました。

かつての当たり前を「贅沢品」に変えた戦争

2011年3月、シリアで戦争が始まりました。見慣れた都市や遺跡が壊され、僕が何度も訪れた村がテロリストに占拠されて小学校の校庭が処刑場になったニュースは現実のものとは思えず、ドラマの1シーンを見るような気持ちでした。就学率も一時期6%まで下がった地域があり、かつてのシリアを知る僕たちには、読み書きができない子ども達の映像は衝撃的でした。

2015年からシリアの人たちが逃れているシリア周辺国と欧州10カ国で、半年間をかけて話を聞いてきました。その

中で、最も印象的だったのは、ヨルダンで出会った少年が「家族みんなでご飯を食べるのが僕の夢なんだ。でも生きている間にその夢は叶わないと思う」の言葉です。かつては「当たり前」だった団欒は、シリアに残る両親、難民として別の国に逃れた兄姉と再会できるとは思えず、「叶わない夢」になったのです。

一方で、変わらないおもてなしとも出会います。「お茶を飲んでいきなよ」「ご飯を食べていきな」と声をかけてくれたり、レストランで会計を出させなかったりするのです。自分が同じ立場なら出来ないと考えたら「かわいそうだから助けたい」ではなく「尊敬する人たちを応援したい」と感じました。

僕に何ができるのか、と考え続ける中、「子ども達は未来だから、教育が必要なんだ」「政治的に複雑さゆえに、最も支援が届きにくいのは難民以上に、シリアの国内に残る人たち」と教えてもらいました。そして、トルコからシリア国内に教育を届けるNGOを立ち上げたシリア人ウサマと出会い、彼と共に2016年から活動を始めました。



2021年から始まった、地域で唯一無料で通える幼稚園に入園希望者が殺到



安全な環境で体を動かすアクティビティ



①活動前に送られてきた空爆で壊された小学校と子ども達
②現地パートナーNGOのウサマ氏と著者
③先生達の継続的な給与



作っているのは学校ではなく未来の世代

Piece of Syria の特徴は「課題ではなく魅力を伝える平和教育」「どこからも支援が届かない地域に住むシリアの子ども達への教育支援」です。

戦争前のシリアがいかに平和で豊かな日常を送っていたかを知ることで、戦争は身近になります。トルコで出会ったシリア人は「なんで難民なのに iPhone を持っているんだ？って聞かれることもあるけど、違うんだよ。難民が iPhone を

持っているんじゃない。iPhone を持っている人が難民になったんだ」と話しました。私たちと変わらない日常が失われるのが戦争であり、誰にだって起こる可能性があります。学校での講演や写真展、イベントを通じて気付きを提供し、一緒に平和について考える仲間を作っていくことを大切にしています。そして、平和なシリアにいつか一緒に遊びに行きましようと呼びかけています。

皆でシリアを訪れるためには、平和の実現が必須条件です。その主体となるのは、外国人である僕たちではなくシリア人自身です。その土台となる子ども達のべ2000人に、幼稚園・小学校における基礎教育と心のケアを提供してきました。

国内避難民が集まり、公共サービスが不十分なシリア北西部では、私達が支援を始めるまで、先生達が無給で先生がいなくなり、学校が閉鎖することもありました。継続的に給与を渡すことで先生が仕事を続けて学校が維持できるだけでなく、「今日の家族のご飯をどうしよう」ではなく「明日もっと良い教育をするには？」と考えられるようになり、教育の質も改善することができました。読み書き計算や、空手や水泳などの心を育てる情操教育アクティビティ、そして戦争の

トラウマと向き合うための心理社会的ケアを実施しています。この時期に教育の土台を身につけることで、小学校から高等教育につながっていくからです。

「生徒達は最初、幼稚園に行くのが好きではありませんでした。家で勉強もせず、何もしないことに慣れていたからです。しかし、職員みんなで幼稚園を楽しんでもらえる工夫を重ねました。今では、子ども達は幼稚園を愛し、勉強を楽しみ、帰りたくないとさえ言ってくれます。幼稚園に通う子ども達の表情が変化し、たくさんの笑顔を見せてくれるようになったことが本当に嬉しいです」と先生から成果について教えてもらいました。

僕たちが作っているのは学校ではなく、未来の世代です。教育の機会を得て、未来への希望を持って成長していったシリアの子ども達が実現する平和なシリアに、皆さんと一緒に訪れる日を楽しみにしています！



教室には楽しみながら学べる先生達の工夫が

Piece of Syria の活動は各 SNS やウェブサイトで発信しております。フォローをお待ちしています！

